

断り表現

—親しさの度合いに着目して—

吉 井 千 明

1. はじめに

依頼に対する「断り」は、依頼主の意向に添えないということを表明するものである。依頼主は相手が承諾することを期待して、依頼をしている。そのため、それに対して「断り」を用いてしまうと、落胆させたり、不快感を与えてしまうかもしれない。しかし、私たちは相手から「よく思われたい」という気持ちを少なからず抱いている。この相反する気持ちを解消し、人間関係を維持するために、理由を説明して相手に理解してもらったり、遠まわしに断ったり、代案を立てるなど、さまざまな方略を用いて、人間関係の維持に努める。その方略の用い方において、日本人とアメリカ人にどのような違いがあるのかに興味を持った。本稿では日英の断り表現を比較しながら、親しさの度合いとの関わり調査する。

2. 先行研究

ポライトネスについては、Brown & Levinson (1987) が展開した理論を、北尾(1988)が以下のように解説している。ポライトネスとは「コミュニケーションにおいてお互いの人間関係をより円滑にし、効果的なコミュニケーションを行うためのストラテジー(手段)」(p.52)であるが、文化によって使用に差異がある。更に北尾は、Brown & Levinson が提唱した概念「フェイス」に言及し、「フェイス」には他人から好かれたいとか、認められたいといった欲求「ポジティブフェイス」(positive face) と、他人から干渉されたくない、抑えつけられたくないといった欲求「ネガティブ」(negative face) があり、人間は両方のフェイスを保ちたいという欲求を持っているとしている。

断りについて、Hayashi (1992) は、ネガティブフェイスを脅かす何らかの依頼に対する好ましくない応答に所属するものと定義している (p.88)。また、蔡 (2005) は「断る側は自分の意思をただ伝えるだけでなく、誤解を生まぬよう、相手との人間関係を保ちながら適切に表現すること」(p.95)の必要性について指摘している。さらに、西村 (2007)

は以下のように述べている。

意に添わないのだから相手にある程度不快な思い、残念な思いをさせるのは避けられないかもしれない。が、それが最小限に済むように何らかの配慮を施すのが普通である。(p.93)

断る側は依頼主との関係を悪化させないように断りの方略を用いている。藤森 (1996) によると、「誘いを断る」という相手との不均衡状態を生じさせたときに「関係修復行為」を行っており、具体的には「関係修復行為」は、「弁明 (accounts)」と「詫び (apologies)」行為から成る。

意味公式についての先行研究としては、伊藤 (2002) がある。伊藤は、Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz (1990) に基づいて意味公式を作成した。伊藤の意味公式は、{結論}、{理由}、{詫び}、{関係維持}、{共感}、{感謝}、{情報}、{条件}、{承諾}、{その他}である。

「断り」の意味公式の出現数と断り表現の長さの研究には、伊藤 (2006) の研究がある。伊藤は、言いにくい事を口にする時、その後の人間関係に影響を及ぼさぬよう、短い表現で済むことを、あえて長い表現を選択して用いている事に注目し、丁寧さと長さとの関係に焦点をあてた。伊藤は「言語表現が長い」と「意味公式の使われている回数が多い」ことを同義とし、意味公式に基づいた分析を行っている。伊藤は日本人の男女116名を対象として調査を行った。その結果、条件つきではあるが、断り表現を長くすることで丁寧さを表すことが出来るということを示している。条件つきというのは、質問数が少なかった事や、紙で行ったアンケートだった事など、問題点が指摘されており、今後結果が変わる可能性もある。

日本人の曖昧な答え方をするという点に関しては、大橋 (2006) は、はっきりと表現することに対する日本社会とアメリカの社会の受け入れ方について以下のように述べている。

はっきりと言葉に出して表現することをよしとしない日本社会では…、「ちょっと今日は…」のように曖昧な表現をする方が好ましいとされる。まして具体的な理由を述べるのは弁明がましく聞こえ日本社会になじまない。一方、英語社会では、「断り」を行う際には明確な理由を述べるのがポライトであるとされる。(p. 60)

3. 調査目的・調査方法

3.1. 調査目的

上記の先行文献から、断ることによって、依頼主との関係を悪化させないために、躊躇してしまうような言いづらい事を述べるときや、依頼を断る際は、フェイスを考慮して発言をしているということが分かった。そのため、きっぱりと命題だけを相手に伝えるのではなく、他の言葉も付け加えて、聞こえの良ようにしたり、それとなく会話を別の方向に流す行動を取っていることも分かった。

本稿では、親しさの度合いに着目し、次の3点を明らかにしたい。

(1) 親しさの度合いが低くなるにつれて、断り表現が長く、意味公式が増えるのかどうか。

伊藤（2006）は、「適切性が具備されていれば、短い表現よりも長い表現のほうが丁寧である」（p.157）と述べている。予備調査から、親しさの度合いが低い相手になるほど、遠まわしな表現を使う傾向が見られたので、断り表現もそれに伴い、長くなるのかどうかを明らかにしたい。

(2) 英語母語話者に比べ、日本人は、曖昧な表現を好むのかどうか。

Beebe 等（1990）は、日本人の弁解が、アメリカ人の弁解よりも曖昧な傾向があると指摘をしている。「弁解」と本論文で扱う意味公式の{理由}は、同義として扱うことにする。野崎（1997）は、「それは、ちょっと……。」といった{結論}のない断りの回答を{曖昧な回答}に分類した。また、野崎は「{曖昧な回答}は、自己の領域確保のために敢えて確答を避け相手の推察を待つ手段である。」（p.23）と述べている。これらの研究を参考にし、本稿では、曖昧な表現とは、具体的な理由が述べられていないもの、{結論}が含まれていないものと定義し、分析を行う。

なお、英語を母語としている国は多数あるが、今回の調査ではアメリカ人英語母語話者に限定する。

(3) 断る際に用いる理由に違いがあるのかどうか。

{理由}を使用する際、時には本音で話すのではなく、嘘を用いることもある。親しさの度合いや、日本人とアメリカ人という違いによって、理由づけの仕方が異なっているのかを明らかにしたい。

3.2. 調査対象

本論文の調査は日本とアメリカのオレゴン州で行われ、20歳代から50歳代までの日本

人日本語母語話者（以下 JJ）の50人，20歳代から50歳代までのアメリカ人英語母語話者（以下 AE）の40人を対象に行われた。回答の内訳は，日本人女性34名，日本人男性16名，アメリカ人女性29名，アメリカ人男性11名で，どちらも女性が7割を占めている。平均年齢は日本人が27.1歳，アメリカ人が35.3歳となっている。日本人とアメリカ人で年齢に差があるが，いずれも社会人である。なお今回の調査では，性別や年齢は対象としない。

3.3. 実施期間

調査は2008年9月中旬にアメリカ，同年9月後半から10月前半に日本で実施した。

3.4. 調査方法

調査はアンケート用紙（付録参照）を用いて実施した。英語版と日本語版の2種類を用意し，それぞれ母語で回答してもらった。回収は，手渡し，もしくは電子メールでおこなった。

3.5. 調査内容

アンケート用紙は談話完成テスト形式で構成されており，場面設定と依頼者の台詞が書かれている。その下の空白欄に，依頼者の台詞に対する応答を回答者の言葉で自由に書く事ができるようになっている。

今回のアンケートでは，話し手と聞き手の親しさの度合いを変化させ，親しさの異なった「近所の人」，「知り合い（クラスメイト，同僚）」，「親しい友達」，「母親」を設定した。なお，自然な回答を導き出したかったため，断り表現に関するアンケートであるということには触れずに，調査を行った。回答の中には，依頼を承諾してしまうものもあったので，依頼に対し承諾をしている回答を，有効回答には含めずに分析をおこなった。

場面設定は以下の4つである。括弧【 】内は依頼主を表している。ここでは，親しさの度合いを低い順に並べているが，実際のアンケートでは順不同に並べ，回答してもらった。

- 1，【近所の人】…「旅行中，ヘビ（／インコ）を10匹預かって欲しいと言われる。
- 2，【知り合い】……「好きなコンサートのチケット」を譲って欲しいと言われる。
- 3，【親しい友達】……「大切な人から貰った財布」を譲って欲しいと言われる。
- 4，【母親】……「お金を貯めてようやく購入した時計」を譲って欲しいと言われる。

本稿では、親しさの度合いの異なる4つの関係を設定し、親しさの度合いが低い順に「近所の人」<「知り合い（クラスメイト，同僚）」<「親しい友達」<「母親」とした。

なお、場面設定1の近所の人への依頼に関しては、アメリカではヘビをペットにしたが、日本ではヘビはペットとして一般的ではないため、インコに変更した。

3.6. 分析方法

分析はアンケートの回答の発話内容から意味公式の部分抜き出して、分類を行う。ここでは、伊藤（2002）の分類に修正を加え、{結論}，{理由}，{詫び}，{代案}，{条件}，{疑問}，{その他}の7種類に当てはめて分類を行った。今回使用する意味公式のうち、伊藤のものを表1、筆者が修正を加えたものが表2である。

表1 伊藤（2002，p.188）の意味公式

意味公式	意味機能	例
{結論}	直接的な表現の断り	行けない／無理です／できない
{理由}	相手の意向に添えない旨の表明	友達の結婚式に出ますから
{詫び}	相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明	申し訳ありません／ごめんね／勘弁して／おこらないで
{代案}	相手との関係を維持したい旨の積極的な働きかけ	～さんに頼んでみたらどう？／代わりを探そうか？
{条件}	断りの担保	時間があれば／約束はしないけど

表2 今回、修正を加え追加した意味公式

{疑問}	相手の発話理由を問うこと	えっ？／なんで？／どうして？
{その他}	上記に該当しないもの	～(場所)で買えるよ／ははっ／え～

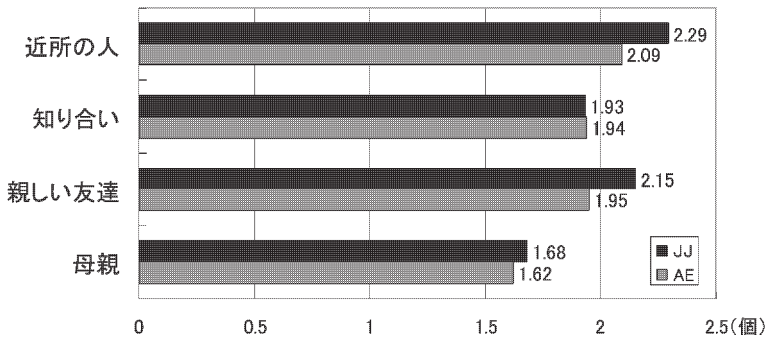
分類は以下の方法で行う。断りの回答が、「ごめん。友達と行くから・・・。」という場合は、「ごめん」が意味公式の{詫び}，「友達と行くから・・・。」が{理由}に分類される。以後、意味公式はすべて括弧{ }をつけて表す。

4. 調査結果・考察

4.1. 親しさの度合いと意味公式の関係性

すべての回答から意味公式を抜き出し、JJとAEそれぞれの平均を出したのが図1である。

図1 意味公式数の平均



例えば、近所の人から「旅行中、ヘビ（／インコ）を10匹」預かって欲しいと頼まれたことに対する断り表現が、「ごめんなさい。ちょっとムリです。」程度の長さだと、文中に{詫び}と{結論}が入っているので、意味公式数は2になる。「ごめんなさい。アレルギーがあるので…。手助けできなくてすみません。」程度の長さであれば、文中に{詫び}、{理由}、{詫び}の3つの意味公式を含んだ文章なので、意味公式数は3となる。目安ではあるが、一つの文章に意味公式は一つ、多くても二つ程度というものが多かった。

JJとAEの意味公式数を、多い順に並べると、JJ、AEともに近所の人<親しい友達<知り合い<母親となった。親しい友達よりも知り合いのほうが親しさの度合いが低いので、断り表現が長くなり、意味公式が増えると予測したが、それに反する結果となった。しかし、母親に関して述べれば、他の関係（近所の人、知り合い、親しい友達）に比べ、意味公式の数は少なかった。これは親しさの度合いが高い人と低い人を比べた際に、予想通り低い人の方が断り表現が短くなった。

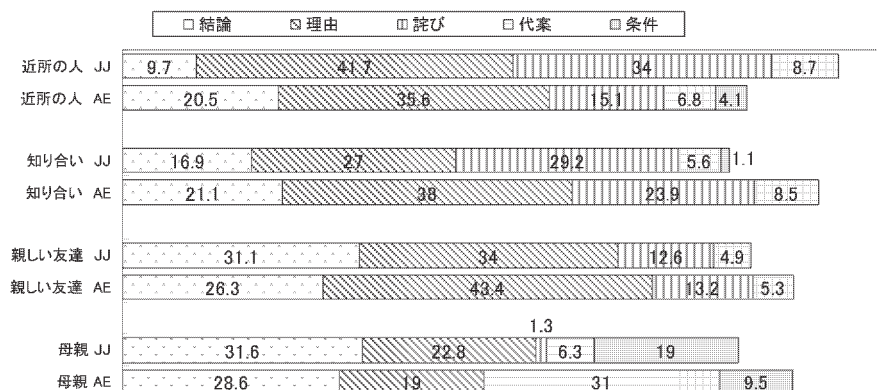
4.2. 意味公式の内訳

意味公式が占める割合を場面ごとにまとめたものを次の図2に載せた。なお、ここでは使用される割合の高かったもののみ、載せている。

4.2.1. 近所の人に対する意味公式

JJとAEの内訳において、{詫び}と{結論}には大きな差が出た。JJは{詫び}が34.0%を占めていたが、AEで{詫び}を用いているのは15.1%であった。これは、JJの

図2 各場面における意味公式の内訳とその割合について



{詫び}の約19%も下回っている。その代わり、AEで{詫び}よりも使用率が高かったのが{結論}である。{詫び}に比べるとJJとAEの差は小さかったが、AEの20.5%に対しJJはその半分以下の9.7%であった。

[例1] 近所の人に対する回答例

JJ 1 : 「鳥が嫌いなんですすみません。」

{理由} {詫び}

AE 1 : “No. I have a fear of snake.”

{結論} {理由}

4.2.2. 知り合い（クラスメイト，同僚）に対する意味公式

JJとAEが使用している意味公式において、{理由}と{結論}の使用率に違いがあった。JJは{理由}が27.0%だった事に対し、AEは38.0%と、約11%の差が出た。近所の人の依頼に対して断る時には、JJの41.7%が{理由}を用いていたので、日本人は依頼主との関係や依頼内容によって、断り方を変えているのだと考える。次に、知り合いに対する断りの時は、JJとAEでは、AEのほうが{結論}を使用していた。AEは近所の人に断る時に{結論}を使用していたのは20.5%で、知り合いの時では21.1%と、ほとんど差がなかった。それに対してJJは、近所の人に対しては、わずか9.7%の人しか{結論}を用いていなかったが、知り合いに対しては16.9%も用いていて、大きな違い

が見られた。

4.2.3. 親しい友達に対する意味公式

親しい友達に対しては、JJ と AE の使用している意味公式の上位3つの順番がまったく同じという結果になった。注目すべきなのは、近所の人、知り合いと比較した場合に、JJ と AE とともに、例2のように、{結論}を用いる割合が最も高くなる点である。

〔例2〕 親しい友達に対する回答例

JJ 1 : 「えー (笑) これは大事なものだから ダメだよ。」
 {その他} {理由} {結論}

AE 1 : “No, my husband gave it to me.”
 {結論} {理由}

きっぱりとした言い方をすると、相手の意向に添えない旨が前面に出てしまうため、蔡(2005)の相手との人間関係を保ちながら適切に断る必要があるという考えに反してしまっている。しかし、親しい友人においては、信頼関係が築かれているため、はっきり断っても人間関係に与える影響が少ないと考えている人が多いのだと思われる。以上のことから、親しい友達に対しては JJ, AE 共に、人間関係よりも「本音」を重要視していることがわかった。

4.2.4. 母親に対する意味公式

母親に対して {結論} を用いる割合が JJ, AE 共に最も高かった。アンケートに断りの文章と一緒に、回答した理由について答えてくれた人がいた。それによると「母親には、気を使わずに言えるから。」という理由があることがわかった。他の関係とは違い、人間関係を考慮しないでよい点が、この結果に現れたのではないかと考える。

4.3. 日本語の曖昧さ

日本語の曖昧さを見るために、二つの観点から考察をする。一点目は、断り表現の言い出し方や終わらせ方について、二点目は断る際の意味公式の {結論} の有無である。

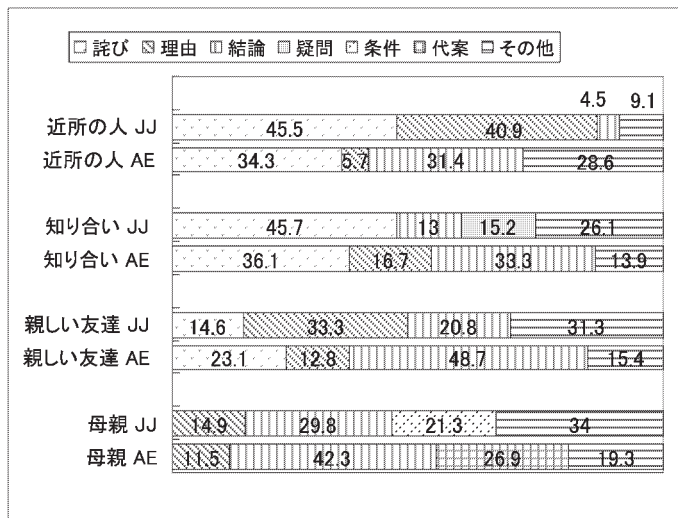
断り表現の言い出し方や終わらせ方を調査するために、発語の冒頭と末尾の意味公式に注目した。断る際に、最後に断りをどうまとめたらかいいのか、相手にマイナスのイメージを与えないようするためにはどうすればいいのかを考えて発話している。また伊藤(2002)は、末尾について以下のように述べている。

断り行為を実現するに際しては、様々なストラテジーを伴うことになる。たとえば相手の意に添えない場合、話の最後をどう結ぶかを苦慮することが多々ある。それは最後の一言によって今後の相手との人間関係が決定されることがあり、十分な配慮が必要だからである。(p.189)

以上の事を踏まえた上で、冒頭同様、末尾にも重要な役割があるのではないかと考え、断り表現の最初と最後に使われている意味公式について分析することにした。

4.3.1. 冒頭の意味公式

図3 冒頭に用いられている意味公式



親しさの度合いに着目して、それぞれの関係を比較した際に、JJ と AE のどちらも近所の人や知り合いに対して断る際には、{詫び}を冒頭に用いている人が多かった。一番初めに{詫び}を使用する事を、林(1999)は、「前置き型の詫び表現」(p.183)と呼んでいる。林によれば「前置き型の詫び表現は「断り」や「依頼」によって生じる相手方の不快状況を修復し、自らの意図を実現しやすくする」(p.183)ためのストラテジーだと述べている。

[例3] 冒頭に {詫び} を用いている例

JJ 1 : 「申し訳ありません。インコはちょっと・・・」

{詫び}

{理由}

AE 1 : “I’m sorry, I can’t do it.”

{詫び}

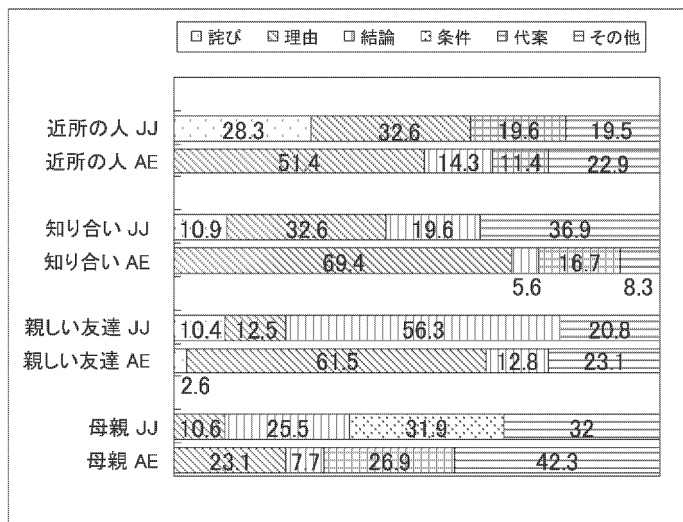
{結論}

例3は近所の人に対する断りの例文なのだが、JJとAEのどちらも冒頭に{詫び}を用いる事によって、相手の依頼を引き受けられない事を表明し、それと同時に不快状況の修復をはかっている。

依頼主が、親しい友達、母親という親しい間柄の場合、{結論}を冒頭に持ってきて断る人が多かった。相手との関係修復を積極的に行わなくても、ある程度、関係の維持が保証されているからだと考えられる。

4.3.2. 発語の末尾の意味公式

図4 末尾に用いられている意味公式



JJ, AEともに、親しさの度合いがあまり高い人に対しての断り方において、末尾に{理由}を用いる人が一番多かった。{理由}を述べる事によって、自分の断りの意図を相手に伝える事が出来るため、断りの際に非常に有効な手段となる。なお、この事については、のちほど4.4の「意味公式の{理由}の内容」のところで詳しく言及するが、

{理由}を述べる事も関係修復に重要な役割を担っていると考えられる。

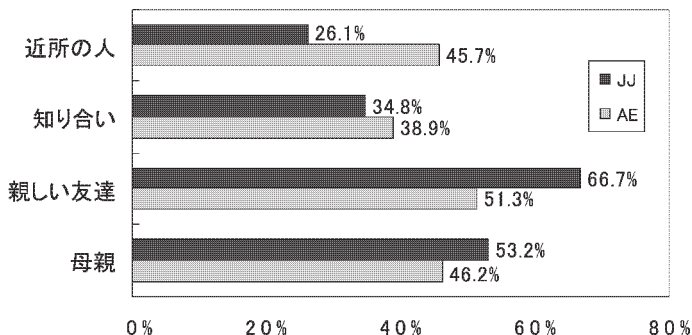
冒頭と末尾を比べた際、末尾の場合のみ多く現れた意味公式は {代案} である。冒頭では、親しさの度合いが高い場合、{結論}が用いられており、あまり関係修復が見られなかった。しかし、末尾では親しい人に対して {代案} を用いて、相手の依頼に応えようとしている意欲を表明し、関係修復が行われているのだと考えられる。親しさの度合いがあまり高い人に対しては、冒頭と末尾の両方で、関係修復を行っている。

以上の事から、JJ と AE は親しさの度合いが高い人に対して断る際には、末尾で関係修復を行っていることがわかった。

4.3.3. {結論} の使用率

次に、各場面において {結論} を使用した人の割合について注目したい。図5は、依頼に対して断った人の中で、意味公式の {結論} を含んだ文章を用いた人の割合を表したものである。

図5 {結論} を用いた人の割合



近所の人、知り合いに対する断りにおいて{結論}を用いた人の割合は、AE よりも JJ の方が少なかった。近所の人、知り合いというのは親しさの度合いが比較的に低い人である。つまり、親しさの度合いが低い人に対して断る場合、JJ は {結論} を用いずに断りを述べようとする傾向がある。はっきり {結論} を述べて、相手との関係を悪くするよりも、その場での人間関係を維持しようとする思いが強いからだと考えられる。一方、この傾向は AE には見られなかった。また、AE は親しさの度合いに関わらず {結論} を用いる事に対し、JJ は親しさの度合いが高い人の時には {結論} を使用し、低い人の時

にはあまり{結論}を使用しない。そのため、JJが親しさの度合いが低い人に対して{結論}を述べずに断ることが、日本人ははっきり答えない。日本人は曖昧である。というイメージにつながってしまったのではないかと考える。しかし、親しさの度合いが高い人に対する断りの場合、AEよりもJJのほうが{結論}を述べる人の割合が多い。このことからJJは、常に{結論}を用いずに断るというわけではなく、相手との親しさの度合いによって、{結論}を用いるかどうかを判断して断りを述べているのだと考えられる。

4.4. 意味公式 {理由} の内容

Beebe 等 (1990) によれば、断りには {結論} などの直接的断りと、{理由}、{詫び} などの間接的断りという分類がある。その分類に対し西村 (2007) は以下のように述べている。

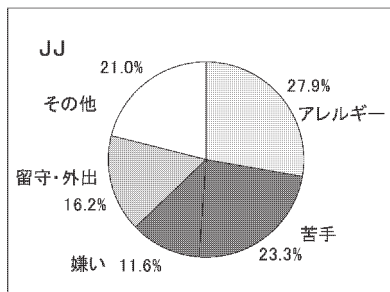
言い訳は断るために絶対なければならないというものではないが、実際、断る際にはその理由を説明することが多く、この理由の説得力、妥当性如何がスムーズに断りを遂行できるかに大きく影響すると思われる。(p.95)

なお、西村 (2007) が引用で述べている「言い訳」と、本論文に出てくる意味公式の {理由} は、同義とする。断る際に {理由} を述べることによって、依頼主のフェイスを傷つけないようにしたり、誤解を招くことを防ぐことができるかもしれない。

以上のことから、詳しく {理由} の内容について取り上げ、分析することにした。今回は紙面の制限から、近所の人に対する理由と、母親に対する理由のみを扱う。

4.4.1. 近所の人に対する理由

〔図6-1〕 近所の人に対する JJ の理由



〔図6-2〕 近所の人に対する AE の理由

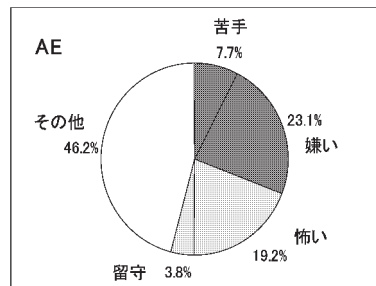


図6-1, 2参照すると, JJとAEで{理由}のうちのけに大きな差が出た。今回AEは「へび」を預かって欲しいという依頼に対するものであったが, JJでは「へび」ではなく「インコ」にした。AEが依頼を断る際の理由として例11のように「へび(爬虫類)が嫌い」とはっきり述べる人が23.1%いたが, JJは「インコ(鳥)が嫌い」と答える人は11.6%にすぎなかった。

[例4] 近所の人に対する理由の回答例1

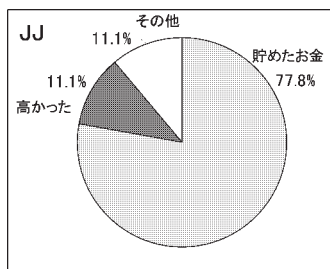
JJ 1: 「アレルギーだから・・・。」

AE 1: “I really dislike snakes.”

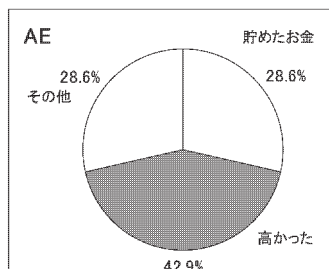
「嫌い」というように, はっきりとした理由を用いて断らない代わりに, JJの回答として目立っていたのが, 例4の回答のように「アレルギー」を断りの理由として用いたもので, 27.9%にも上った。林(1999)は, 「Hayashi (1997b)の調査でも, 自分の力ではどうしようもない理由の妥当性が高く評価」されると述べている。(p.178)その最もたる理由として, 「家族の不幸」があげられている。アレルギーというのは, 体内の免疫機能が異常に反応してしまい, 症状が起こることであり, 本人の意思とは関係なく発症してしまう。アレルギーも, このような理由にあてはまる。その上, 依頼者がそれ以上に依頼をすることを避けることが出来る。「嫌い」「嫌だ」と, きっぱり結論を出すことに比べ, 相手との関係を維持したまま, 断ることができるのでJJに好まれる回答と思われる。しかし, へびにもアレルギーは存在するが, AEでアレルギーを理由に依頼を断る人はいなかった。

4.4.2. 母親に対する理由

[図7-1] 母親に対する JJ の理由



[図7-2] 母親に対する AE の理由



母親に対する断りの {理由} に関しては、割合は JJ と AE で違うものの、{理由} の内容の種類に JJ と AE にあまり大きな違いがなかった。なぜなら、近所の人など親しさの度合いが低い相手に比べて、人間関係を気にすることなく、はっきりと断ることができるからだ。そのため、それに伴う {理由} も「貯めたお金」、「高かった」のどちらかに分類できるものが大半だった。親しさの度合いが高くなるにつれて、{理由} の種類が少なくなってくる傾向が、今回の調査の結果にあらわれていた。

5. おわりに

本稿の調査で分かったことは次の3点である。

- (1) 条件付きではあるが、親しさの度合いによって、断り表現の長さも変化することである。親しさの度合いが高い母親と親しさの度合いが低い近所の人を比較すると、近所の人に対しての断りのほうが意味公式の数が増え、断りの長さが長くなった。しかし、親しい友達と知り合いを比較した際には、親しさの度合いが低いと設定した知り合いのほうが、表現が短かった。
- (2) 意味公式の使用率が JJ と AE では異なっており、AE は使用されている意味公式の中で {結論} が占める割合がいずれも20%を越えていた。一方、JJ で近所の人や知り合いといった親しさの度合いが低い人に対して使用する意味公式の中で {結論} が占める割合は20%未満であった。{結論} の代わりに {理由} を多用する点が、「日本人は曖昧である。」というイメージにつながってしまったのではないかと考えられる。しかし、親しい友人、母親に対しての断りにおいて、JJ は AE よりも、{結論} を用いている割合が高い。つまり、JJ は AE よりも、親しさに敏感に反応して断り表現を用いており、曖昧な回答ばかりを用いるのではないことがわかった。
- (3) {理由} において、JJ は親しさの度合いが低い場合、親しさの度合いが高い時に比べて、嘘や遠まわしな内容が増えることである。近所の人に対する断りの {理由} では、嘘である「鳥アレルギー」という {理由} を用いるものが JJ に27.9%もいたが、他の関係において嘘を用いることはほとんどなかった。

今回の反省点として、データ収集の方法があげられる。

データ収集は、紙による談話完成テスト形式だったため、調査対象者が質問に一问一答で答えるところで調査が終わっている。そのため、断りの行為を行ったあとの会話のやりとりを調査することはできなかった。

林 (1999) は、会話全体を分析する必要性を以下のように述べている。

断りも依頼も相手に負担をかけるという意味では共通である。断りにしても(中略)、依頼の話談にしても、すでに会話展開の中で終了しているにも関わらず、それに対する修復作業としての詫び表現が、最後にもう1度用いられている。(p.185)

今後は、ロールプレイや会話のやりとりの一部始終を想像して書いてもらう調査や、断片的なやりとりではなく、会話の流れの中で使われている断り表現についての研究を行いたい。

参考文献

- 伊藤恵美子 (2002) 「マレー語母語話者の中間言語に見られる語用論の特徴—断り表現における普遍性と特殊性—」『ことばの科学』vol.15 pp.179-197 名古屋大学言語文化研究
- 伊藤恵美子 (2006) 「日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか—長さとの適切性からの分析—」『異文化コミュニケーション研究』第18号 pp.145-160 神田外語大学
- 大橋まりこ (2006) 「言語能力と語用論的能力—初級レベル英語学習者の「断り」から—」『湘北紀要』第27号 pp.53-67 湘北大学
- 北尾健治・北尾 S キャスリーン (1988) 「ポライトネス—人間関係を維持するコミュニケーション手段—」『日本語学』第7巻 第3号 pp.52-63 明治書院
- 蔡胤柱 (2005) 「日本人母語話者のEメールにおける「断り」—「待遇コミュニケーション」の観点から—」『早稲田大学日本語教育研究』第7号 pp.95-108 早稲田大学
- 西村史子 (2007) 「断りに用いられる言い訳の日英対照分析」『世界の日本語教育』17号 pp.93-112 独立行政法人国際交流基金
- 野崎尚子 (1997) 「断りの表現における日英対照研究」東京女子大学現代文化学部言語文化学科卒業論文
- 林明子 (1999) 「会話展開のためのストラテジー—「断り」と「詫び」の出現状況と会話展開上の機能—」『東京学芸大学紀要2部門』第50集 pp.175-188
- 藤森弘子 (1996) 「関係修復の観点からみた「断り」の意味内容—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—」『大阪大学言語文化学』vol.5 pp.5-17 大阪大学
- Beebe, L. M., Takahashi, T. and Uliss-Weltz, R. (1990). *Pragmatic transfer in ESL refusals. Developing Communicative Competence in a Second Language* New York : Newbury House pp.55-73
- Hayashi, T. (1992). On polite refusal. 『龍谷紀要』第13巻 第2号 pp.87-102 龍谷大学

ABSTRACT

This thesis compares how Japanese and Americans use refusals in their native languages when they are requested to do something. The data were collected from 50 Japanese and 40 Americans who answered a discourse completion questionnaire which asked about refusals in four different relationships: with neighbors, acquaintances, friends and mothers. The questionnaire examined three variables: the relationship between the closeness and the length of the refusal expressions, whether Japanese prefer to use vague refusal expressions, and the reasons given for the refusal. The data for refusal expressions were analyzed by the meaning of the content, the sequence (especially the beginning and the end) and the number of semantic formulas.

There were three main findings. Firstly, both Japanese and Americans prefer to use long expressions when they refuse those who are more distant to them. Secondly, Japanese people sometimes don't use the semantic formula 'conclusion' when they want to use refusal expressions. However, when Japanese are communicating with people closer to them, they use a 'conclusion' a lot. While Japanese use 'conclusion' depending on the relationship, Americans use it when interacting with both people close to them and people distant to them. Finally, Japanese sometimes avoid the truth when they use refusal expressions to those more distant to them because of their wish to maintain good relations. When Japanese use refusal expressions to people close to them and Americans to both people close to them and distant to them, Japanese and Americans tend to be more truthful and use more concrete reasons.

【付録1】日本語母語者用アンケート

東京女子大学現代文化学部6年の吉井正明と申します。大学で言語学について学んでおり、卒業論文のためのアンケートを実施しています。

もし協力してくださる場合は、下記のアンケートに記入の上、返却をお願いします。

なお、集めたデータは卒業論文の執筆のみに使用し、執筆後は責任を特って放棄します。個人が特定されることはございません。

年齢 _____ 性別 _____

以下の質問のときに、あなたならどのように答えるかお書きください。

(1) あなたの好きなアーティストのコンサートのチケットを届きました。
あなたの顔見知り程度の知り合いがその事を、聞きつけ・・・
知りない：「そのチケットを譲ってもらえませんか？」
あなた：「 _____ 」

(2) あなたは大切な人からお財布をプレゼントしてもらいました。
仲良しの友達に会った際、友達がお財布を見て・・・
あなたの友達：「そのお財布、とっても可愛いね～！譲ってくれない？」
あなた：「 _____ 」

(3) 財布、あなたは貯めていたお金をはたいて、尚額な時計を購入しました。
あなたの母親がそれを見て・・・
あなたの母：「良い時計をつけてるわね、この時計、気に入ったわ！私に、くれない？」
あなた：「 _____ 」

(4) あなたは鳥が嫌いです。ある日、お隣さん（近所の人）が、たずねてきました。
お隣さん（近所の人）：「旅行に行っている間、インコを10匹預かってくれませんか？」
あなた：「 _____ 」

(5) あなたは明日締め切りのレポートを仕上げするために、パソコンを使っています。
そこに兄弟（姉妹）がやってきて・・・
あなたの兄弟（姉妹）：「このパソコンでメールをチェックさせてくれない？」
あなた：「 _____ 」

【付録2】英語母語者用アンケート

My name is Chiaki Yoshi. I am senior student at Tokyo Woman's Christian University majoring in Linguistics.
I am conducting a survey to write my graduate thesis and would like you to participate. I am distributing a survey to the parents of students in Kindergarten. I appreciate your willingness to participate.

Guidelines:

1) The data I am collecting will be used only for my graduate thesis and for no other purpose.
2) Your responses to these questions will remain private and will only be reported in the aggregate.
3) Your responses will be destroyed once my thesis has been completed.

If you wish to contact me, you can email me at chatty0922@yahoo.co.jp. Thank you.

== Please write down in your own words. ==

(1) You are given free concert tickets for your favorite artist.
An acquaintance asks to buy your ticket.
You say " _____ "

(2) You have a nice purse which is given by your sweetheart.
You met a friend and he/ she said "It looks nice! Would you give it to me?"
You say " _____ "

(3) Recently, you bought a new watch. You spent a large amount of money.
Your mother said "Oh, I love it ! I want it. Will you give it to me?"
You say " _____ "

(4) You don't like reptiles. One day your neighbor asks you "Would you keep me my 10 pet snakes during my vacation?"
You say " _____ "

(5) You are working on a term paper on the computer and it is due tomorrow.
Your sibling asks you if she can check her e-mail.
You say " _____ "